

## 三玄三要に就いて

對 本 愛 道

「三玄三要」の垂示は、臨濟に始つたものであるが、臨濟錄中には、唯舉起するのみでそれに就いての概念的な布説はない。之は慈照の「報備諸方道。三玄句不分。欲明親的旨。蘊月太陽春」や汾陽の「三玄三要事難分。得意忘言道易親。一句明々該萬象。重陽九日菊花新」や竹庵の「句中難透是三玄。一句該通空劫前。臨濟命根元不斷。一條紅線手中牽」等の頌に現はれるやうに、概念的には分ち難いものであつて、「玄」と謂ひ「要」と謂ひ何れも語としては極度に抽象的であり、それだけ反面に無限の概念を含むものであることを考へても、了解が出来るやうに思ふ。

「三玄三要」の語は、臨濟錄の

上堂僧問。如何是第一句。師云。三要印開朱點側。未容擬議主賓分。問。如何是第二句。師云。妙解豈容無著問。遍和爭負截流機。問。如何是第三句。師云。看取棚頭弄傀儡。抽牽都來裡有人。師又云。一句語須具三玄門。一玄門須具三要。有權有用。汝等諸人作麼生會。下座。

とある「一句語須具三玄門。一玄門須具三要」にその出據を置く。しかし此の「玄」「要」の語が何

を意味するか、又「三玄」「三要」とは何と何であるか等に就いては、以後の示衆說法の中にも説かれてはゐない。「人天眼目」及「五燈會元」には、一句語須具三玄門の前に「大凡演唱宗乘」の六字があり、又有權有用と云ふところも「有權有實有照有用」と云ふ風になつてゐるが、果して言はれるやうに「眼目」や「會元」が、考證的に現行本「臨濟錄」に對して相當の權威をもつ資料であるならば、「句」は宗乘演唱の言句、即ち言說の句であると思はれる。「玄」は、強ひて求むれば臨濟錄の「道流。把得使用。更不著名字。號之爲玄旨」又「把得使用。莫著名字。號爲玄旨」等とある玄とみられるが、因にこの玄旨に就ては、趙州眞際語錄に、

師示衆云。佛之一字吾不喜聞。問。和尚還爲人也無。師云。爲人。學云。如何爲人。師云。不識

玄旨徒勞念靜。學云。既是玄。作麼生是旨。師云。我不把本。學云。者箇是玄如何是旨。師云。

答爾是旨。

とあつて、玄は言外にあるもの、旨は言句の内にあるものと指示されてゐることを參照すれば、玄は言句の相ではなくて、體（本分）を意味する語であり、句との前後關係は玄―句―旨の概念形式にあるものと考へられる。「要」の語は、臨濟の第一句頌に三要印開云云とみえるのみで他には出て來ぬ語であり、これのみを參考にしても、それが臨濟の居た唐時代にあつた印章の何かの概念であるか又はそれに拘らず法的意味としての臨濟の發明語であるか、今は明瞭ではない。がその頌の

意味からみて、それが或るは、たゞ、即ち「用」に關する概念をもつた語であらうことは知られ、更に想像を加へて、一般に海印三昧等の言葉があり又「大凡演唱宗乘」の冠頭があることから、その「用」は所謂大機大用の用であらうと考へられぬでもない。しかし「三玄三要」の一々の分類に至つては、臨濟の垂示からは——言句の相からは、知る由もない。或ひは、次の「有機有用」から權實を玄、照用を要に關係づけて云云することが出來ぬのでもないが、これとても權實が玄である等と云ひ得るのみで、玄が直ちに權である——玄とは權實なりと云ふことには受取れない。

斯くて、概念的には此の垂示は甚だ不明瞭なものではある。しかし、之は概念的の限りに於てであつて、實は臨濟錄の全體に於て、近くは「三句」の中に於て分明であり、隨つて古人も此の中でそれを會得されてゐたやうである。之に就いては、臨濟の三句は「眼目」「會元」にあるやうに「問如何是真佛眞法眞道。乞垂開示——若第一句中(薦)得。與祖佛爲師。若第二句中(薦)得。與人天爲師。若第三句中(薦)得。自救不了」の一段——これは臨濟錄では示衆の部にみえる——に直ぐ續いたものとして取扱つた向が多いやうである。此等に依れば、三句は何れもこの三玄三要に通ずる理をもつてゐるのであつて、之を布衍して古人は三玄三要を種々な方法で教示されてゐる。今夫等によつてその内から概念的なものを抽象してみる。

先づ、汾陽に依れば

夫說法者。須具宗師眼目。須識玄門。要辨縑素邪正。古人道。玄有玄路。鳥道難通。一語不玄。

流俗阿師

とあることから、玄は單に語句に關してのものであるのみに止らず、「玄之又玄」と云ふ様に數段に涉つて受取られるものであることが教へられる。そして此處に擧げられた說法者の三條件も、その玄の一に相當するものゝやうである。仮三玄とは、彼は僧の間に對して、第一玄には「親囑飲光前」第二玄には「絕相離言詮」第三玄には「明鏡照無偏」と云つてゐる。臨濟の「有權有用」が第二玄第三玄に關することは、之で知り得られるやうであるが、今此處では、第一玄は「理」第二玄は「智」第三玄は「用」(行)であると了解して置く。次に彼は之を頌して曰く

第一玄 照用同時全。七星光燦爛。萬里絕塵煙

第二玄 鉤錐利更尖。擬議穿腮過。裂面倚雙肩

第三玄 妙用其方圓。隨機明事理。萬法體中全

とあり、更に別處には

第一玄 法界廣無邊。森羅及萬象。總在鏡中圓。

第二玄 釋尊問阿難。多聞隨事答。應器量方圓。

第三玄 直出古皇前。四句百非外。閻氏問豐干。

頤の眞意は、凡庸の覗ふところではないが、二頤共に理智用の配列であり、初めのものは「用」的な理智用、あとのものは「相」的な理智用と云ふ風にと受取れると思ふ。「相」的な三玄の頤には、汾陽自身之を述べて一玄から順次に、直教也、決擇也、明白也と云つてゐることも參考となる。此等を綜合してみるに、三玄とは理智用或ひは理智行の三であつて、之は「相」に於ても「用」に於ても通じて存在する玄門であると云ふことになる。随つて曩の説法者の三條件として擧げられたものも、此の概念を含むことから、夫等は三玄の配列に依るものと會得出来るやうである。

次に、慈明は三玄を頤して

一玄 三世諸佛擬何宣。垂慈夢裏生輕薄。端坐還成落斷邊

二玄 伶俐衲僧眼未明。石火電光如是鈍。揚眉瞬目涉關山

三玄 萬象森羅宇宙寬。雲散洞空山嶽靜。落花流水滿長川

と云つてゐるが、之も理智用なることを示し、「體」的な方面を擧起したものゝやうである。

次に、海會は、「一玄。釋尊光射阿難肩。二玄。孤輪衆象攢。三玄。泣向枯桑淚漣々」と云つて三玄に各々語を置いてゐるが、之も「相」的になつてゐるだけで理智用に變りはない。

次に、此の間、所謂雲門嗣古塔主がある。「夾山抄」等によれば、三玄を以て體中玄句中玄玄中玄と名けたのは、實に此の古塔主である。「會元」には

饒州薦福承古禪師。操行高潔……一日覽雲門語。忽然發悟。自此韜藏不求名聞。棲止雲居弘覺禪師塔所。四方學者奔湊。因稱古塔主也云云

とあるから、古塔主とは此の薦福の謂とみられるが、其處には三玄のことは出てゐない。且らく「夾山抄」に之をみると

三玄者。林際只云三玄三要耳。後來雲門嗣古塔主分之云。（註）體中玄三世諸佛所悟句中玄歷代祖師所用語句玄中玄三世佛歷代祖師所用とある。之を以てみれば、一玄は三世諸佛の所悟とあるから「理」であり、二玄は歷代祖師所用の語句とあるから「智」に相當し、三玄は三世佛歷代祖の命脈とあるから「用」に相當すると考へられ、汾陽等に於けるものと同様に見倣される。ところが此處に尙一層明確とされてゐる點は、體中玄は以下の二玄に對應して體相用の概念に於ける體として受取れること、句中玄は此の意味から相としての理智用であり乍ら同時に語句と限定するところ乃ち具體的な語句それ自體にも三玄の理が含まれてゐること、及び玄中玄は用としての理智用であるが「大機大用」にも此の理が布衍すること等である。古塔主の此の樹て方によつてみれば、三玄門の法理は、凡そあらゆる部門を一貫しあらゆる部門に含まれてゐる無限の概念であることが知れる。

「禪家龜鑑」には三玄を叙して「體中玄。三世一念等。句中玄。徑截言句等。玄中玄。良久棒喝等」と云つてゐるが、之は語句に關して具體的なものゝ三玄の配列である。隨つて言句自體にも三玄の

表顯があり、妙喜は之を次の如く分類して示衆してゐる。

作麼又有一種。將臨濟三玄雲門三句。逐句解說。以傳燈廣燈祖師言句。各分門類。以一塵纔起大地全收。一毛頭師子百億毛頭師子現盡大地是箇解脫門。盡大地是沙門一隻眼。若人識得。心大地無寸土山河大地明暗色空咸是妙明真心中物之類。配爲體中玄函蓋乾坤句。以三脚驢子弄蹄行。鋸解秤椎火裏蟬。螻吞大虫。文殊起佛見法見。貶向二鐵圍山。東山水上行。北斗裏藏身。凡語言注解不得。處便道蚊子上鐵牛。無偏下背處。如此之類。謂之句中玄。截斷衆流句。如踢著秤椎。硬似鐵。踢破草鞋。赤脚走饑來喫飯。困來打眠。山是山水是水。行但行坐但坐。大盡三十日。小盡二十九。將如此之類。謂之玄中玄。隨波逐浪句。(正法眼藏三ノ下)

之によつてみれば、三玄に配列される句は、夫々理、智、用の概念をもつたものであり、尙此の示衆から雲門三句も此の三玄の理をもつことを知ることが出来る。尙之に續いて、妙喜は、汾陽自身三玄總頌を三玄に配當してゐることを述べてゐる。

此老子明々爲爾指。出臨濟骨髓。却來逐句下。解注謂。三玄三要事難分。是總頌。得意忘言。道易親。是體中玄。一句明々該萬象。是句中玄。重陽九日菊花新。是玄中玄。云云

斯うした概念を以て臨濟錄をみると、隨處に三玄の配列を覗ふことが出来るやうに思はれる。例へば、冒頭に引用した上堂に於て之をみれば、

一玄 如何是第一句師云三要印開云云 ……理、(直教)

二玄 一句語須具三玄門云云 ……智、(決擇)

三玄 下座 ……用、(分明)

と云ふ風に考へられるし、又更にその三句に於ても

一玄 一句。三要印開朱點側云云 ……理

二玄 二句。妙解豈容無著問云云 ……智

三玄 三句。看取柳頭弄傀儡云云 ……用

就中、各一句とも又三玄に分配し、例へば三要(一玄)印開(二玄)朱點側(三玄)となるやうに思はれる。

しかし乍ら、臨濟が此の三玄門を舉示する所以は、斯かる語句の解剖に意を置かしめんとするものではない。語句は單に名字であり依變の境に過ぎない。然るを敢て舉起するは、學人をして真正無依の道人たらしめ、自由の天地に驅りたてんとする手段としてあるのみ。此の意味に於て、語句は邪正を辨じ緇素を分つ底の活句たるべく、而も正しく三世諸佛の所悟に叶ひ且つ佛祖の命脈大機大用に依據するものでなければならぬ。三玄の垂示は、此の意味に外ならず、随つて問答商量に現れる臨濟の言句は、或ひは權實、或ひは順逆、或ひは縱橫、或ひは與奪、或ひは自在の機用を



有し、随つて言句の意味としての定相はなく、その眞底に至つては臨濟と同一個でなければ容易に驢の測ることを許さないのである。此の間の消息は次の臨濟自身の示衆に現はれてゐると思ふ。

道流。如諸方有學人來。主客相見了。便有一句子語。辨前頭善知識。被學人拈出箇機權語路。向善知識口頭攪過。看爾識不識。爾若識得是境。把得便向坑子裏。學人便尋常。然後便索善知識語。依前奪之。學人云。上智哉是大善知識。卽云。爾大不識好惡。如善知識。把出箇境塊子。向學人面前弄。前人辨得。下々作主。不受境惑。善知識便現半身。學人便喝。善知識又入一切差別語路中擺撲。學人云。不識好惡老禿奴。善知識歎曰。眞正道流。云云

しかし、今茲に三玄門を意味として卽ち「旨」として取扱はんとする此の小考からすれば、臨濟の三玄の垂示は次のやうに跡づけて考へられると思ふ。卽ち、凡そ宗乘を演唱せんには(一)語句は三世諸佛の所悟に叶ひ(二)邪正を辨じ縑素を分つ活句であり(三)佛祖の命脈大機大用に依據すべきことと云ふ、つまり語句の「體」的な理智用としての三玄(體中玄)と、語句に(一)理的語句(二)智的語句(三)用的語句の類別あるを了識すべきことと云ふ、つまり語句の「相」的な理智用としての三玄(句中玄)と、語句の用ひ方に於ける謂はゞ(一)權說(二)實說(三)權實不二と云つた機用を了識すべきことと云ふ、つまり語句の「用的」な理智用としての三玄(玄中玄)——以上の三段の玄門を具すべしと。ところが更に三玄門の理からして、この前後に更に三玄としての條件があ

ることを知らねばならない。それは先づ(一)須具宗師眼目(二)須識玄門(三)要辨縑素邪正と云つた三玄と、次に語句の(一)存在論的理解(二)文法的理解(三)價値的理解と云つた三玄とである。仮以上を通覽して三玄門は、理智用の各一が體相用の三に展開し、更に此等が又各三に展開する即ち「一即三」の無限に展開する概念形式をもつたものであることが知られると思ふ。更に之を哲學的にみれば三玄門は、體相用が體相用に展開し、この展開したものが更に夫れとは超越して(之は次の「三要」にて明白である)體相用と展開する、即ち體相用の、單に平面的ではなく、立體的或は幾何學的な構成概念をもつたものであると云ふ風に理解されると思ふ。

次に「三要」とは何を意味するか。汾陽は此の間に答へて、第一要には「言中無巧妙」第二要には「千聖入玄奥」第三要には「四句百非外。盡踏寒山道」と云つてゐるが、之は畢竟「大機」の諸相であつて、體相用とある概念で配列したものではないかと考へられる。そして之は次の頌に於て一層明確となつてゐるやうである。即ち汾陽の三要頌に

第一要 根機但亡絕朕兆。山崩海竭洒飄塵。蕩盡寒灰始爲妙  
第二要 鉤錐察辨呈巧妙。縱去奪來掣電機。透匣十星日光耀  
第三要 不用垂鉤并下鉤。強機一曲楚歌聲。聞者盡教來返照  
尚、次の慈明の頌、海會の語に於ても、同様な配列として理解出来るのでないかと思へる。

一要 豈話聖賢妙。擬議涉長途。擡眸七顛倒

二要 岸頭敲健石。神通自在家。多聞門外叫

三要 起倒令人笑。掌內握乾坤。千差都一照

一要 最好精麤照

二要 閃爍乾坤光晃耀

三要 夾路青松老

即ち一要は大機の體、二要は大機の相、三要是大機の用で、換言すれば、大機——照——用となり  
若し想像が許されるならば、所謂四照用はこの第三要の用にあるものと思はれる。「禪家龜鑑」に  
叙するところの「一要。照即大機。二要。照即大用。三要。照用同時」もかうした意味の分類では  
ないかと考へる。(註二)

此の了解が許されるとすれば、「三要」は大機大用に即した側であつて、之を「三玄」と對應す  
るとき、裏に相當し、哲學的の所謂自覺に外ならない。随つて、之は表顯の世界に住せず、爲に古  
人も呼んで、一要二要三要とするのみである。此の間の消息は、汾陽も示衆中に

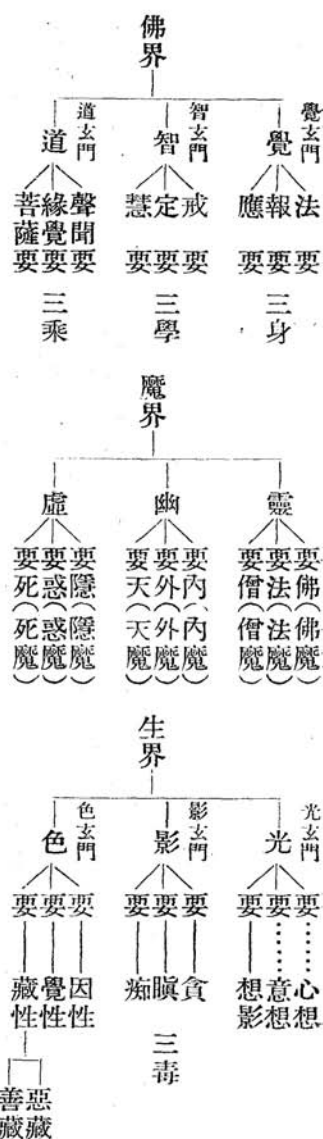
(問)著力處。(師)曰。嘉州打大像。轉身處。曰。陝府灌鐵牛。親切處。曰。西河弄師子。若人會  
得此三句。已辨三玄。更有三、要、語、在。切、須、薦、取。

と述べて、自己への返照を促してゐる。

假、禪に於ける看教の態度は、「もの」をその相に於てみるのではなく、體、相、用の全體に於てみる、つまり、それとは超越して直ちに「本分」に對應せしめるのである。

爾欲識文殊變。爾祇目前用處。始終不異。處々不疑。此箇是活文殊。爾一念心無差別光。處々總是眞普賢。爾一念心自能解縛隨處解脫。此是觀音三昧法。互爲主伴。出則一時出。一卽三三卽一如是解得。始好看教。(臨濟錄)

随つて此の見方による「三玄三要」は、それ自身活句として置かれ、見處も上來とは著しい光彩を放つ。「夾山抄」に之をみれば、「句」に註して「無文彩。莫爲語句會」とあり、「玄要」とは「體用及本分見成之義也」とあり、或ひは又「三玄門」に傍註して「理致機關向上」と引例するが如き、之である。「玄」は玄旨の場合に分明であつた如く「本分」に外ならぬ。而も今舉起するところ、即ち抽象し來れば、既にそれは本來の「玄要」ではない。「玄」と舉す。故に「要」が隨ふ迄である。まことに三要印開して朱點側つであり、見成の義に外ならない。茲に於て汾陽は三玄の總頌中に曰く「一句明々該萬象。重陽九日菊花新」と。尙、古塔主はこの三玄三要を三界に展開し萬象に配當せしめ次の如く表してゐる。



(夾山抄所見)

以上視ひ來るところによつて、「三玄三要」は概念的に之を言へば、理智用の「一即三三即一」を以てする根本智にその基範を置き、語句をその「一即三三即一」に準據して配列する形式であつて、此の間「大機」の自覺を反省せしめるものであると考へられる。

(註一)「禪家龜鑑」には「權實玄、照用要」とある。之を以てすれば、有權有用の四字は、三玄三要を本來の立場から述べた批判的な説明句であつて、之を假に三玄に配當してみれば一句語須具三玄門一玄門須具三要(體中玄)有權有用(句中玄)汝等諸人作麼生會下座(玄中玄)と云ふ風に了解されると思ふ

(註二) 後來、體中玄を以て理中玄、玄中玄を以て用中玄とする向もある。夾山は、此の古塔主の配列を以て不可とし、逆に玄中玄、句中玄、體中玄とすべしとする。その理由は

三玄三要に就いて

(一四)

私推古塔主配當。蓋如從卑漸次登高。此蓋令知回互也。但林際三句三玄三要者。從頓門出漸次。此令知有自己分也。從頓門出漸次者此以下(後出の謂)眞佛眞法眞道則之也。末云。若第一句中得。與祖爲師。第二句中得。與人天爲師。第三句中得。自救不了。此以第一句爲上。以第二句爲中。第三句爲下。以此推。第一句即玄中玄。第二句即句中玄。第三句即體中玄也。又是準汾陽三玄答處云云

とあるから、臨濟の家風を尊重しての配列替へと云ふことが出来る。即ちこの配列に隨へば、第一玄は三世佛歷代祖の命脈(用)第二玄は歷代祖所用の語句(智)第三玄は三世諸佛の所悟(理)となる。ところが夾山は「上堂僧問如何是第一句」を註して

眞佛言前妙旨。卽理也。三玄中強準之。玄中玄也

と云ふ。眞佛言前妙旨は古塔主の所謂三世諸佛所悟に外ならぬと思へるが、これならば、敢て異動の要はない。但し強準之とあるところ、見處を變へてのことゝも見られるが、之は夾山の機略であらうか。若し、理を玄中玄に配當するまゝに進めば體中玄は用(行)とせねばならない。此處に至つて用語が問題となり、隨つて最初に古塔主が如何なる眞意で「體」「句」「玄」を擧起し來つたかゞ吟味されねばならない。何れにしても再考を要すると思ふ。

(註三)「夾山抄」には三要是「畢竟性智行之三也」とある。